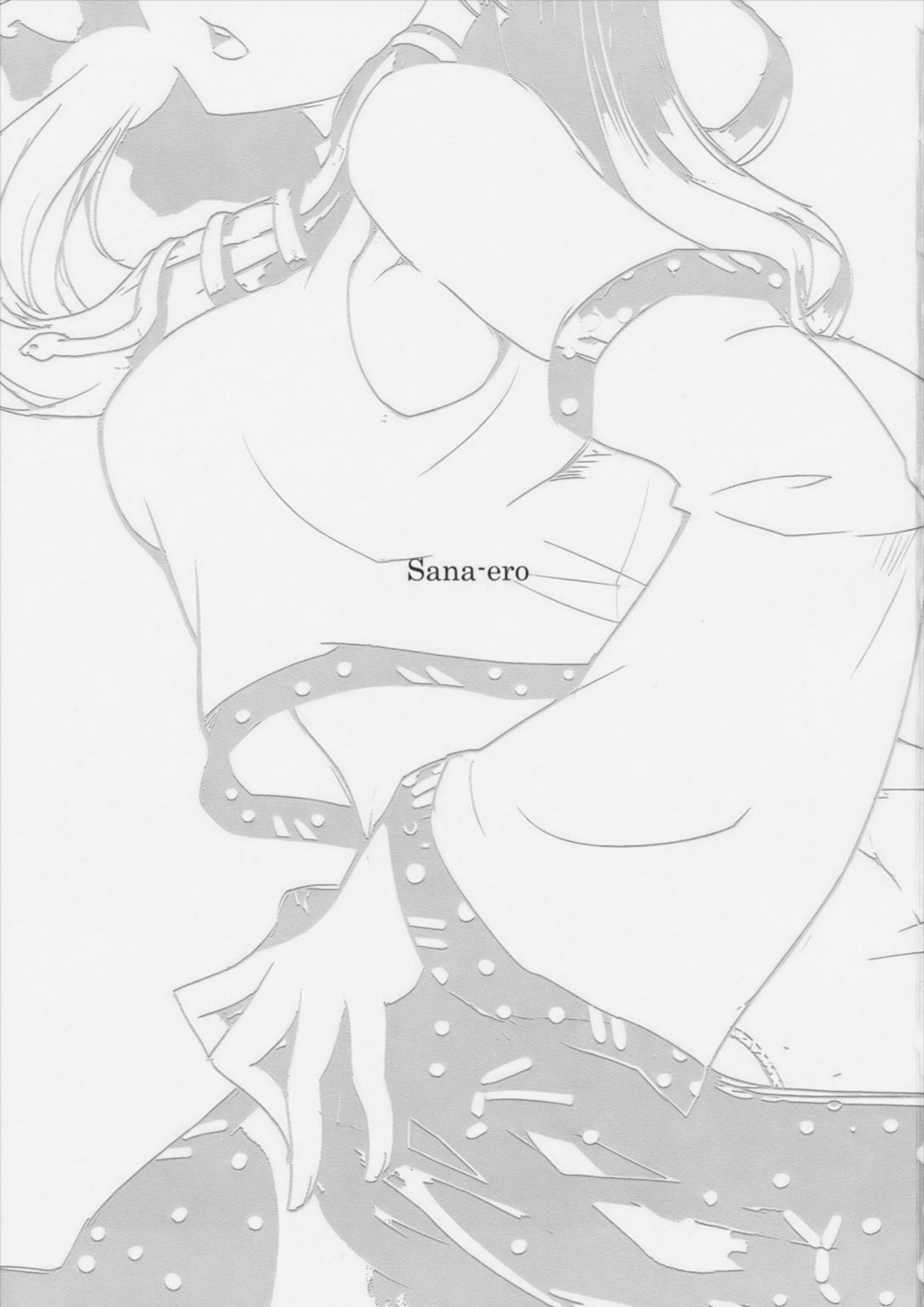




# さなえろ!

For Adult Only





Sana-ero

まなえる!

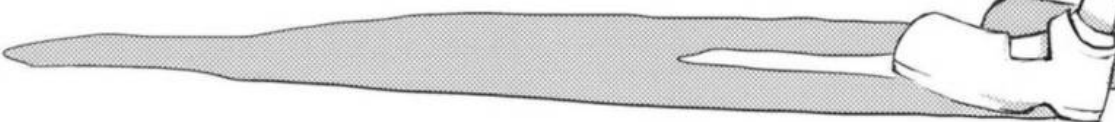
INDEX

5- miya9

11- しろし

19- 西村 にけ

27- 豊





やっ  
か、神奈子様あッ

んっ

諏訪子様  
ばれちゃいますう…ッ!

あら

それでこんなに  
興奮してるのかしら?

きゃッ

こんなに  
勃起させて

早苗は  
やらしいわね

あ…っん!  
擦っちゃ  
だ、ダメですっ!

ぐんぐん

ぐんぐん

こし















# 後書き

こんにちわ

白ネギ屋のmiya9です  
神様はちんちん生えてるって誰かが言うてた気がします  
早苗さんのがしごかれてるシーンが描きたかっただけな気がします  
そんな話でした  
ではでは  
読んで頂きありがとうございました



















うるさいな！



コッチは溜まってるのに  
信仰は溜まらない  
んですねえ……



と、ほー——ん!



\* あとがき \*

工日本はむうかしい! しりしてす。

初めて描くことになって四苦八苦、

工描い子人すげえ!、こなりました。

拙いアしとすか、読んで頂きたいかとございました。

面白こと書け、と言われたけど無理だよ! バカバカ  
さうめんたいいす

<http://shirofox.web.fc2.com/>

守矢神社

うくん…

ないわけじゃないと  
思うんだけど…

おきこやっ

ちっちゃな

さなぱい!

present by 西村 につ

はあ…

もう少し位  
あつたつて  
よかつたのよ

…

神奈子様ほどく  
なんて思つてる訳じゃ  
ないんだけど…

あつちの雑誌も  
殆ど試しちゃつた  
しなあ…

二ヨキ



いやあ、  
早苗も大人に  
なったんだねえ…



どれもこれも  
当てにならないなあ

この使用前と  
使用後なんて  
明らかに別人じゃない

パラパラ…



くわーん

なになに

「驚きのバストアップ  
マッサージ!」…?  
本当に効くの?これ

諏訪子様!?



す、すwっ

あ  
い



どうしよう…  
嫌な予感しかない…

もーっ早苗ってば!  
そういうことなら早く言いなよ!  
ケロちゃんにお任せなんだから!



やつあのっ  
これはですねっ!

…諏訪湖様?

ホフ



ほらっ!

ひゃあ

すわこさま...

ふふっ

こういうのはね  
一人でやったって  
なんにも意味ないんだよ

ニ  
ザ  
ッ

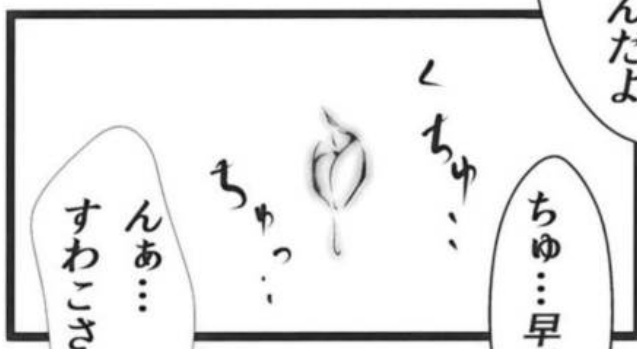
ちゅ...早苗...

す、諏訪湖様!?  
あの...っ  
一体何をおお...  
おお...っ

ん...

ちゅ...  
ちゅ...  
ちゅ...

んあ...  
すわこさま...





よっしょっしょ

私は別にちっちゃくてもいいと思うんだけどねえ



や…っ！  
まって…！

はあ…っ！



どうして…  
諏訪子様…

私は…



二人でえっちな気分になるとおっぱいはおつきくなるんだってさ



ふふ…  
乳首立ってるの分かる？


ふあ…あつ！

ゴッゴッ




！？

こーやって…




ん…つちゅ…  
ほら、早苗？  
我慢しなくて  
いいんだよ？




早苗のおっぱいだって  
さきつぽがツンって…  
えっちななっちゃって  
いいんだよ…？




ぐわん！  
ぐわん！  
ぐわん！



も…駄目…  
駄目なのに…



諏訪子様の前で…  
こんなこと…



でももう…  
我慢できないよ…っ！







— 傳と信仰 —



どうもはじめましてコンニチワ、西村 にけです。  
今回早苗さんのエロ合同誌ってことで参加させて頂きました。

思った以上にケロちゃん分多めでお送り致しました(汗  
最近どうもケロちゃんが可愛くて仕方ないんですよ  
多分非想天則あたりのせいだと思うんですが  
よかったら生暖かい目で見守ってやって下さい…

初の合同誌ということで色々分からないことだらけで  
他の3人には迷惑掛けまくったのではないかなあと…  
それでも楽しくできたのでまた企画があれば是非やってみたいですね、合同。

それではまたどこかでお会いできる日を  
この本を手にとって頂いた方、他の3人の企画参加者に最大級の感謝を

西村 にけ

【現人神の契約　～　洩矢の場合】

豊

そこは、静寂に包まれていた。

「…ようやく、来ていただけましたね」

「あたしは面倒くさいことは嫌いじゃないけど、堅苦しいことは嫌いなんだよ…」

私の視線の先、御神体の前に浮遊する

一人の女性。

名は八坂神奈子。私が仕える神の具現。

「お待ち申し上げておりました…」

「んー出てくるつもりはなかったんだけど」

「それでも今宵は契機の夜。主賓が留守では成り立ちません」

「現代の祝に神は不要。あなたもわかってるでしょう…」

「それでも、私の道は変わりません」

その言葉に八坂様は頭を掻きながら、だが真剣な声色で答える。

「本当にいいの？」

「覚悟は、できております」

「今となつちや誰も本当の意味で神なんか必要としない。風祝の巫女だって、もう何代も役目を果たしちゃいない。あなたも、好きに生きればいいのよ？」

「…覚悟は、できております」

繰り返す言葉に、もう何を言っても無駄だと思つたのか。八坂様は半身に構えていたその身体を、私の正面に向け、私に顔を上げるように言った。

「そこまで言うならいいでしょう」

そう言う八坂様にさっきまでの雰囲気はない。そこには、洩矢の神社を背負う神がいる。

洩矢の、風祝の契約の儀…

「心配しなくても、吞ませて、あげるわ」

そう言うと、神奈子は神前に供えてあつた徳利を掲げ、大きな杯に注ぎ始める。

「…上質な酒ね。近年ではなかなか目にした事がない」

杯の縁で白い指を遊ばせ、酒に幾重もの

波を生み出す。八坂様の神々しい雰囲気と相まって、その様は幻想的で、そして同時に扇情的であつた。

「さて、始めましょうか」

そう言うといきなり八坂様は、自分の唇で私の唇を塞いだ。

いきなりのことに目を白黒させていると、口の中に甘い液体が流れ込んでくる。最初は八坂様の唾液かとも思ったが、それにしては量が多い。それが先程口に含んだ酒だと知つたのは、二回ほど喉を鳴らした後だつた。

「んっ…」

口の間から息が漏れる。もう二人の口の中には酒など残っていないのに、いつまでも唇を離す事が出来ない。それはまるで、八坂様に舌を絡めとられている様だつた。

「ちゅ…」

無言が支配する空間で、滴る水音だけが耳をくすぐる。時折八坂様は流すような目で私を見るが、私は小さく喉を鳴らすことしかできなかった。そしてその様を、



愉快そうに目を細めて楽しむと、また同じ様に舌を絡ませます。

「ふふ…本当に美味しいお酒…今年は奮発したのね？」

「あ」

ようやく開放されたと思った私の口から漏れ出した言葉は、解放の安堵ではなく、もつと絡ませていたかったという羨望の吐息。

「八坂、様…」

「あなたもこっちにいらっしやい…。早苗」

「はい…八坂様」

逆らう、なんて言葉は頭の中になかった。むしろ、頭の中で形をなす言葉など、その時はありもしなかった。ただ目の前の存在から目を放せない。

「さあ、お舐め…早苗…」

その声に誘われるように、唇に這わされた指を口に含める。こわこわと触れた指先は、かすかなお酒の香りと、

「ちゆく…ちゆく…」

味はしなかった。代わりに、酒とは到底思えない、甘い、ただただ甘い透明な蜜が

口の中に広がる。それをただひたすら舐めた。

「あ…ん…はむ…っ」

白く細い指に、滑る様な爪。夢中になって舌を這わせながら、しかし八坂様の顔を見ることができない。

ただただ指先をむさぼることに集中していて、いつの間にか八坂様のもう一方の手が、私の袴を解いているのに気がつかなかった。

「——え？」

「あら、もついいの？」

私が指から口を離すと、八坂様は残念そうに手を引つ込める。はっと我に帰った私は、顔がぼつと熱くなるような錯覚を覚えた。

「な…あ…」

何とか袴を直して後ずさりしようとした。だが、腰から下が言うことを聞かないことに愕然とする。

「あらあら…どうしたのかしらね？」

「そんな…八坂様…」

それが八坂様の力によるものなのか、それとも本当にただ気持ちがよくて腰が抜け

てしまっただけなのか。だが、救いを求めるように再び八坂様と目を合わせた私は、またしてもその視線に絡めとられる。

「早苗はもう酔ってしまったのかしら？」

「いえ…そんなことは」

「早苗は、お酒に対する礼儀というものを知っているかしら？」

「…いえ」

「酒はそれぞれ呑むべき温度というものがあるわ。熱燗しかり、冷酒しかり…」

そう言いながら手に持った徳利をちやぽんと揺らす。

「このお酒は、どうやって呑むのが礼にかなっているのかしらね…？」

妖艶、そしてどこか無邪気さを孕んだ笑顔で八坂様が問う。そして私はその答えを知っている。だが、私の口は震えるようにして言葉を紡いだ。

「わかり、ません…」

その言葉に、八坂様は口の端をゆがめた。

「あつ…」

流れるような動作で、肌蹴かけていた小袖を脱がされる。その拍子に、ぶるりと揺れて小ぶりな乳房が露になった。

滑らかな流線を描く肢体が薄暗い部屋に映える。しみなどとは無縁のその瑞々しい身体は、純潔を守る巫女の証だった。無言のまま八坂様は手に持っていた徳利を、私の喉元に捧げる。顔元に近づけられた徳利の口から、くらくらするような香りと、透明な液体が覗いていた。

「さあ…」  
その妖艶な瞳に導かれるままに、私は徳利を受け取り、そのまま自分の肌に向けて徳利を傾ける。

「ひゃ…」  
その酒の冷たさに身体が震える。鎖骨を通り、乳房へとその酒は流れる。さらさらと粘度の低い液体が身体を撫ぜるのは、まるで羽毛で梳かれているような錯覚を起し、火照った身体をさらに敏感にさせる。

乳房をなぞるように流れた酒は、そのままお腹を通り、正座して閉じた太もも

と下腹部の谷間に溜まっていく。

ゆらゆらと下の髪が酒の湖に揺れる。少しでも力を抜けばそのまま畳の上にこぼれてしまうだろう。私は必要以上に力を込めた。

やがて、徳利の中身をすべて流し終わったと思つたら、下に溜まる酒は、すでに冷たくはなく、むしろ人肌に温められて、さらにその香りを強めていた。その香りから逃れることができない私は、身体の火照りがさらに増したように感じる。

「ふふ…よくできました。どうかしら？ 気分は」

「は…あ…ん、大丈夫、です…」  
「あらあら…まあ、わかめ酒って言うのは、下の口からお酒を楽しむものでもあるしね」

そう言われて、じわじわと酒が秘所から体内にしみこんでくる感覚が強くなる。さつきから頭がうまく回らないのは、酒が入って酔っ払ってしまったせいなのだろうか。  
「粗相をしないように、ね」

八坂様は私の背に腕を回すと、その顔を

私の股間に近づける。恥ずかしさで顔から火が出そうになりながらも、私は抵抗できなかった。

「ぴちゃ…」  
ミルクを飲む猫のように、舌ですくって酒を呑む。その度に私の股間にできた池は波を立てた。

「んああ…」  
「…たったこれだけで、こんなにも感じているの…？」  
「…」

八坂様の熱い吐息が太ももを撫ぜた。酒をこぼさないように力を入れていた身体は、たったそれだけのことで強張ってしまふ。

と、強張ったのと同時に秘所に少量の酒が吸い込まれる。

「…ん…」  
ほんの少量のはずなのに、嘘のように下の口を刺激する。ぴりりという刺激の後には、燃えるような熱を発し始めた。

すでに濡れてきていた愛液と混ぜあって、粘膜で酒を味わう。その刺激にじっと耐

えた。

「顔が真っ赤よ…そんなに力んでいては酒を味わうこともできないでしょう？ 力を抜いたら？」

「い、いえ…」

私の答えに一瞬不満そうな顔をした八坂様は、だがしかしすぐにその表情を崩す。

「そうよね…力を抜いたら酒がこぼれてしまふものね…。仕方がないわ」

自らの口の端からこぼれた酒を人差し指でぬぐう。

「自然に力を抜いてあげるわ」

「ひゃんっ…」

おもむろに人差し指で酒の跡が残る乳房をなぞられる。それだけでも声が漏れるほどの刺激なのに、八坂様はさらに乳首をいじめだす。

「あ…いや…い…」

弛緩と強張りが交互に私を襲う。その度に秘所に酒が入り込み、私の身体を熱くした。

「うふふ…本当に可愛い子…」

「は…あ…」

だんだん視界に霧がかかってくる。だが、気を失うことは許されない。再度酒を嗜み始めた八坂様の舌が、小さな刺激を送ってくる。

「…ふふ。美味しいわよ、早苗…」

「…ん…」

八坂様は今度は犬のように鼻を鳴らして股間に顔を埋める。そしてそのまま私の股間にくちずけて、わざと音を立てるように酒を舐めとり始める。

「へろっ…ぴちゃ…ん、んん…くちゅ…」

「や…あ…あふっ！ ふ…うん…ん！ い、いや…」

「嫌、なんてことはないでしょう？ ほら…」

舌を鳴らし、上目遣いで私を見ながら、

八坂様が私の汗と愛液の混じった酒を呑む。

「ひゃふっ！」

一際大きな波が私を襲う。

内股に溜まる酒はもうなくなりかけている。だが、度数の高い酒だ。乾けば乾くほどに身体は熱を持ち、特に下腹部は内側から燃えるような熱さを放っていた。

「あ…あつ…い…」

「ちゅ…ん…。ううん…早苗？」

八坂様が私の名を呼ぶ。だが、耳までその声は聞こえているのに、頭でそのことを理解できない。立て続けに襲ってくる波が、私の感覚を確実にふやかしていた。

そんな状態の私を相変わらず楽しそうな瞳で見つめる八坂様は、何を思ったか、もう酒のない内股に、手を忍ばせたかと思うと、何の前準備もなく秘所に割って入ってきた。

「や、やさか…さま、今は…だめ…」

「あら？ 何が駄目なのかしら？」

その言葉と共に下の唇に指が触れる。続けようとした言葉は漏れる声に変わり、あわてて口をつぐむ。

「…かしら？」

「…や、やめ…」

その唇の奥。器用にかぶせを取り払ったかと思えば、ためらいもなく外気にさらされた豆を、指の腹で転がした。

「ひ、ああああああっ！」

保っていた理性がはしけとび、一際甲高



い声をあげて気をやった。

どくどくと心臓が早鐘を打ち、沸騰したような血が全身を駆け巡っていくのがわかる。そのくせ、口をあげているのにもつとも息ができない。頭に血が上り、くらくらと酸欠を起す。

「あ…あ…」

「あらあら…もうおしまい、なのかしらっ」

その言葉に返す言葉はなく、私はただひたすらに酸素を求めた。

「ふふ…まあ、今日のところはこの辺で引いておきましょうか」

そう言うと、八坂様は私の耳元で歌うように囁く。

「楽しかったわ、早苗。今日はもうお休みなさい。また今度、ね…」

「あ…はあ…ふ…」

緊張と快樂の糸が切れ、私はそのまま仰向けに倒れ、気を失った――。

「いっしょっ」

稗田阿求の持つ筆は、書きはじめに比べて明らかに動きが鈍っていた。

「…どうかしたの？」

傍でその様子を見ていた早苗は、不思議そうな顔をして阿求の顔を覗き込む。

「どうかした、じゃありませんッ！」

ぱつと顔を上げた阿求の顔は、赤く染まつており、目尻にはうつつすら涙も見える。

「誰が官能小説を書きたいって言ったんですかっ！ 私はあなたが起す奇跡の力についてお聞きしたはずですよ！」

「いやだって、私が現人神になった経緯ですよ？ だからこうやって冒頭からちゃんと説明をして…」

「するとなにですか？ 貴女はわかめ酒で杯を交わすことが神々への礼儀で儀式だとか？」

「うん」

あつけらかな。ずばり実直なその一言は、阿求の頭痛をさらに強くする。自分は記憶を司る者で、そういう知識もあるにはあるが、はつきり言ってこれはただのセクハラな

んじゃないだろうか。

「洩矢の神々は過激ですね…」

「あ、諏訪子様は別ね。神様って言うてもこいうのに免疫ないし」

「…貴女は巫女としてもう少し恥じらいというものをですな」

「でも処女だよ？」

「そういうことを臆面もなく堂々と、しかも普通に大きい声で言うこと自体間違っているんです！ というかそれはもう巫女云々とかではなく人としてどうかと思います！」

「そうかな…」

巫女で処女って言うのはステータスになりえないのかな、とつぶやく早苗を尻目に、阿求は今しがた自分が書き記した濡れ場をどうしたものかと忸怩たる思いで眺める。こんなものを後世に残したりしたら、九代目阿礼の子の名が泣いてしまう。

「どうしようかしら…」

「何を？」

「決まってるじゃないですか！ この煮ても焼いても食えない利用価値のない愚作で

すよ！」

「む！ 貴女、利用価値がないですって？  
多分森の人形遣いあたりに持っていけば、  
いろんな意味で有効活用してくれるはず  
よ！」

「怒るところそなんですか！ 洩矢の儀  
式を貶されたところを怒ってください！」  
「洩矢の儀式が、なんだって？」

不意に第三者の声が混ざる。阿求が振  
り返ったその先には、いつの間にか八坂神  
奈子が腕組みをして立っていた。

「あら、神奈子様。どうしたんですか？」  
「どうしたもこうしたも。昼飯の食材買い  
に行ったまま帰ってこないから探してたん  
だよ」

「あ、すみません…つい話し込んでしまっ  
て」

「一応ここ、私の家なんです。どうやって  
入ったんですか…？」

「開いてるところから入った」  
「…いいです。もう」

だんだんとこの破天荒な神々との接し  
方がわかってきた阿求だった。

「…で、儀式がなんだって？」

「洩矢に伝わる儀式の話をしていたんです  
よ」

「……」

そういえば、目の前の二人がさっきみたい  
なことを…と思うと、阿求の顔が少し赤く  
なる。だが、当人たちはいたって普通のよ  
うで、表情など微塵も変わらない。

「わざわざ話すようなものでもないでしょ  
うに。ただ酒を飲み交わすだけなんだし」  
「洩矢の神々は普段からああして酒を飲ん  
でいるんですか…」

「？…どういふこと？」

視線を合わせない阿求を不審に思った神  
奈子は、机の上に置いてある和紙を手に取  
り、目を通す。

無言のまま二枚、三枚と紙をめくった後、  
小刻みに震えながら顔を上げた。そして、  
阿求と視線が合うと、ぼん！と音が聞こ  
えそうな勢いで顔が真っ赤になる。

「あ、あ、ちが…」

「…落ち着いてください。よもや私もここま  
で見事な赤面を目撃できるとは思ってませ

んでしたが、心中お察しします。とりあえ  
ず落ち着きましょう」

冷静にそうなだめて、深呼吸をした後、  
神奈子はきつと阿求を睨む。

「なんだこれ！」

「何って…早苗さんから伺った『洩矢に伝  
わる契約の儀』ですが」

「そんなわけないでしょ！ どの世界に  
わかめ酒で酒呑み交わして契約する神様  
がいるっていうのよ！」

「そう言われても…」

「早苗！ 何でたらめ…」

見れば。そこには買い物籠。わざわざ残  
していくあたりに、早苗の性格が垣間見  
える。

「…逃げましたね」

「さっ」

その後に続くだろう言葉を察して、阿求  
は目と耳を冷静に塞ぐ。

「早苗えええええええええええええええつ！」

幻想郷は、今日も平和だった。

あとがきと言う名の雑談

8月。夏コミ終幕。日付も変わろうかという車の中で、その男は言った。

「なあ…」

「うん？」

「早苗さんってビッチだよな…」

「…いや、清純だろ」

「んなことないよ。エロいもん」

「エロいことは認めるけど、ビッチではないだろ」

「そうかなー」

「そうだよ」

「…なあ」

「うん？」

「早苗さんエロ合同作ろうぜ」

「…mjd？」

というわけで豊さんです。皆さんはじめましてお久しぶりでございます！

前後の文の脈絡がないとか、話し飛びすぎだとか、まあそれはおいといてですね。早苗さんエロ合同ですよ。ひゃっほう！

この会話の後シチュエーションについてあれこれ意見を交わすんですが、まーこれが長ったらしいんですけども、短くまとめますとね、

「尻！」「ワカメ酒！」

の二言にまとまるという、なんとも欲望に忠実な作成会議だったわけですよ。て言うか片方意見が親父過ぎるだろ。なんだワカメ酒って。

…豊さんですけどね。声を大にして言ったの。

いわゆる芸者遊びは男の浪漫…とはよく言ったものの、いやー書きにくい書きにくい。ビジュアルを武器に使えない分、何とか内面を描こうと四苦八苦した結果がこれです。

…途中で恥ずかしくなって失速して、最後はギャグにまとめるというチキンな豊さんです。許して下さい m(\_ \_)m

さて。皆さんすっきりとあとがきまとめられていて、何一人長々と書いてんだとお叱りを受けそうなのでこの辺で。

企画参加の3人とこの本を手にとっていただいた皆様、そして東方好きなすべての人に最大限のリスペクトを。ありがとうございました！



この度は本を手にとって頂きありがとうございます  
合同誌という事でまあ、あーでもないこーでもないと  
久々にみんなで本を作るという事が出来ました

少しでもお楽しみ頂けたら幸いです  
それではっ！

By miya9

～興付～  
東風谷早苗合同誌  
**さなえろ！**

発行日：2009/10/11 第五回東方紅樓夢

発行：白ネギ屋

責任者：miya9

連絡先：miya9@hotmail.co.jp

URL：http://miyazz.web.fc2.com/

印刷所：



**SUN GROUP**

http://www.sungroup.co.jp/

参加者（敬称略）

西村 にけ

URL：http://cherish24.web.fc2.com/

しろし

URL：http://shirofox.web.fc2.com/

豊

URL：http://cafefreestyle.web.fc2.com/





TO-HO PROJECT

FAN BOOK

2009.10.11